



外国人支える「ママ」

202 湯川ルシレーネさんの30年

3歳の娘が熱を出した。娘を抱いて、病院に向かった。

「ネツ、ネツ」。病状をジェスチャーを交えて伝えようとした。その様子がおかしかったのか分からぬが、病院の医師やスタッフが笑い出した。

「『なんで笑ってる?』と聞きたかったけど、日本語が出てこなかった」。湯川ルシレーネさん(57)=高岡市=は、30年余り前に母国ブラジルから日本に移り住んだ当時を振り返る。怒りが込み上げたが、ポルトガル語を訳す辞書を見せながら伝えるしかなかった。

現在のように、翻訳してくれるスマートフォンはない。頼りにできる人も近くにいない。「あの頃、厳しかったね。ブラジルに帰りたいと思うことが結構あった」

もともと数年働いてブラジルに戻るつもりで来日したが、人生の半分以上を日本で暮らす。言葉の壁に苦しみながらも、会社を立ち上げて、働く外国人をサポートし、学童施設やサッカー教室などを設立。4人の子どもを育ててきた。

◇

湯川さんは、ブラジルのサンパウロでサトウキビ農園を営む家に生まれた。地元の大学に進み、英語などを学んだ。20歳で日系2世の男性と結婚。湯川は夫の名字だ。長女を出産し、高校の英語教師をしていた。

当時、ブラジルは不景気が長期化していた。一方、日本はバブル景気で製造業などの人手が不足。1990年の入管難民法改正で、3世までの日系人と家族が定住して働くようになり、多くの人が海を渡った。

日本の給料はブラジルの6倍くらいとされた。湯川さん夫妻は日本で3~4年働いてブラジルに戻れば、家や車が買えると考え、日本で働くことを決めた。お金を早くためるために、愛知の会社などよりも残業が多くできる富山の会社を選んだ。

92年7月、夫妻は幼い長女と共に飛行機で来日。南半球のブラジルが冬だったので、日本は暑く感じた。湯川さんは木材会社に派遣され、木材を選別して運ぶ力仕事を任せられた。職場の人から日本語を勉強するように言われたが、教わる場はなく、独学するしかない。だが、仕事と子育てに追われ、時間的な余裕は少なかった。

長女は保育園に入れたものの、開園時間以外に面倒をみててくれる人がいないのが悩

みだった。支えてくれたのが、保育園で朝の時間帯にアルバイトをしていた有沢亜弥子さんだった。有沢さんは保育園の近くに自宅があり、迎えが遅くなる時などは長女の面倒をみてくれた。現在80歳となった有沢さんは「湯川さんの家族は明るくてね。国とか関係なく、自然と親しくなってました」と振り返る。

◇

来日して5年ほどたった頃、湯川さんは大学院で専門性の高い英語を学ぶため、家族でブラジルに戻った。母国で子育てしようと考えたが、不況が続き、治安も悪い。「やっぱり安全な日本の方がいい」と思い、卒業後に再び富山に戻った。

当時、外国人を派遣する会社には、英語を話すフィリピン出身者の登録が増えていた。湯川さんは食品工場で働く予定だったが、英語が使えるため、日本人との橋渡し

は名刺を受け取ろうともせず、追い返された。ある派遣先に外国人が病欠することを伝えると、怒鳴りつけられ、駐車場に戻って車の中で涙したことがあった。だが、同じ日に別の会社から20人の派遣依頼があり、「神様、ありがとう」と心から思った。

湯川さんの会社には、多い時で約400人の外国人が登録。2022年に外国人の子どもを預かる学童施設、24年には輸入食品店を高岡市内で開くなど、外国人が暮らしやすくなる事業を相次いで始めた。母の仕事をサポートし、今は幼い2児を育てる長女の小百合さん(35)は「言葉が分からぬ國に来て、いろんなことに挑戦するのは、子どもの私から見てもすごい」と言う。

長男の勇治さん(23)は母の勧めで行政書士となり、書類作成や手続きの面で外国人をサポートしている。「いつも忙しい母を見てきたから、『時間がない』と言い訳で

ら声をかけられた。日本にゆかりのある人のようだった。湯川さんはサッカー教室の夢を語ると、男性の父親も日本でスクールの立ち上げを考えているという。

父親の名前を聞くと、「ジーコ」と言われた。「本物のジーコ?」。湯川さんは驚いて聞き返した。男性は、元ブラジル代表選手で日本代表監督も務めたジーコさんの息子だった。しばらくして、ジーコさんから直接電話があり、夢が実現に向けて進んでいった。23年にジーコさんが監修した教室「ジーコ10・サッカースクール」が射水市で、さらに静岡県浜松市でも開講した。

外国にルーツを持つ子どもは学校でいじめられ、不登校になるケースがある。湯川さんの子どもも嫌がらせを受けた経験があった。「学校とは別にサッカースクールがあれば、サポートできる」と湯川さん。実際にサッカースクールでの活躍を機に、学校に通うようになった小学生もいたという。

◇

起業した人材派遣会社は24年にたたみ、事業を別の会社に引き継いだ。湯川さんはその会社の派遣事業部長として、今も変わらず外国人のサポートを続けている。

「ママ」。県内などで働く外国人たちは、湯川さんをそう呼ぶ。仕事や育児など経験が豊富で、母親のような頼れる存在だからだ。最近はビザの更新などの相談が増え、ひっつきなしに電話やメッセージが来る。外国人政策が厳格化されるという情報が流れ、不安になっているのだ。

日本人と外国人が分かり合うには何が必要なのか。湯川さんは言う。「みんな人間。心がある。おなかが痛いのも、つらいのも、外国人も日本人も一緒。だから、相手のことをもうちょっとと考えなきゃならない」

湯川さんの夢の一つが、サッカーのトレーニングセンター。廃校した校舎を活用し、サッカーだけではなく、高齢者が体を動かせる場所にしたいと考えている。場所は県内の予定だ。「私、心は富山人ね。富山で好きなことにもっと力を入れたい」。実現には高い壁があることは分かっている。「難しいけど、私は簡単に諦めないから」

湯川さんの起業家としての原点になったのは、来日してから経験してきた苦労です。偏見を持つ人もいるならば、他人を思いやることができるのも人間です。「心があるのは、みんな一緒」。湯川さんの言葉は心に響きます。



「寒のうち」 広田 郁世

役として、派遣会社で働くことになった。

派遣の仕事に役立つ国家資格の衛生管理者試験を自費で受験。毎日午前3~4時まで勉強に励み、日本語の設問に苦戦しながら2回目の挑戦で合格した。

湯川さんは会社のルールに疑問を感じていた。外国人からの問い合わせに対応できるのは、業務時間内だけ。だが、外国人は仕事だけではなく、生活面に不安を抱えている。それは湯川さんが痛いほど分かっていた。「人材派遣会社が扱うのは物ではなく、人間」。湯川さんは外国人の気持ちに寄り添ったサービスをするため、独立して人材派遣会社を高岡市内に設立した。

「外人?」「社長が女?」。営業先で偏見の目で見られることがあった。アポイントメントを入れた会社を訪れたが、担当者

「きない」と話す。

次男の信治さん(21)はブラジルでプロサッカー選手として活躍。三男の秀樹さん(16)は岐阜のサッカー強豪高校に進学した。

◇

湯川さんが新しく立ち上げた会社で運営しているのが、サッカー教室だ。

きっかけは、信治さんだった。小さな頃からサッカーがうまく、より高いレベルでサッカーを学べる場が地元に欲しいと思っていた。欧州や南米の有名チームのサッカースクールを開けないか調べてみると、金額的に難しく、諦めかけていた。

だが、「神様」がほほ笑む。仕事でブラジルを訪れた際、セミナー会場の休憩所で、日本語で電話をしていた。すると、男性か



子どもや孫に囲まれ、笑顔を見せる湯川さん(手前中央)



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時~午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

0766-25-7773

niji@kitanippon.jp

次回掲載は3月1日(日)です。

紙面提供／人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局